作　　文

小学校　最優秀賞

「ぼくと兄」

大豆島小学校　５年　　牧野　颯介　さん

　ぼくには、中学二年生の兄がいる。昔から、ぼくはずっと兄についていき、ずっとそばにいる。その兄はとってもやさしい。ぼくが仮面ライダーが好きだったころ、悪者役をしてくれたり、勉強で分からないところがあったら、いっしょに考えてくれたりする。とにかく、「いやだ。」という言葉を全く言わないのだ。ぼくはバスケットボールをやっている。始めた理由は、兄が始めたからだ。実際に、兄がバスケットボールをやっているところを見ると、とてもきつそうだった。けれど、前だけ向いてがんばっていた。だからぼくも始めた。

　兄は中学一年生になると、いそがしくなり、家族といっしょにいる時間ががへってしまった。そのせいか、ぼくはインターネットにはまってしまった。一日の半分ゲームをする日もふえていき、よけい、兄といっしょにいられる時間が少なくなっていった。兄も、友達と遊ぶことも多くなり、もうぼくとは遊ばなくなった。兄は部活、ぼくはゲーム、なんだかぼくは悪いことをしているように感じてきた。兄は部活でがんばっているのに、ぼくはダラダラゲームをしている。せめて、兄が一緒にいる時間だけでも、ゲームをやめていっしょに庭でバスケットボールをするようになった。兄にバスケットボールを教えてもらい楽しさを知った。この日から、ぼくはゲームの時間よりも、バスケットボールの時間がふえた。そうしたら、今度は兄のスマホの時間がふえてしまった。それを見たぼくは、かまってほしくてちょっかいをかけたが、兄がおこってけんかになることが多く、ちょっかいをかけるのはやめた。

ある日、兄と母とぼくで、バスケットボールの日本代表のゲームを見に行った。

試合を見ていると中、兄が一つ一つのプレーを解説してくれて、とても分かりやすかった。

「どうしてそんなにわかるの。」

と聞いたら、

「スマホでよく見ているからだ。」

と答えた。だから、あんなにスマホを見ていたのだと思った。

　兄は中学二年生になり、部活の部長になった。それもやっぱりど力しているからだと思う。やっぱり兄はぼくとはぜんぜんちがうな。今でも、無意識に、兄のとなりにいることがある。兄のとなりはなぜかとても落ち着く。それは兄が大好きだからなのかもしれない。何があってもけっきょく全て「お兄ちゃんが…」になっている。けんかもよくするけど、ぼくの兄は、じまんできるほどかっこいい。今もこうやって幸せにくらせているのも兄のおかげなのだ。いつかぜったいに、兄におん返しをしてみせる。ぼくのかっこいいお兄ちゃん、いつも本当にありがとう。

中学校　最優秀賞

「最高の幸せとは」

犀陵中学校　１年　　金沢　瑚夏さん

「代わってあげられるなら代わってあげたい。」

　私が小学校五年生の頃、母に言われた一言だ。

　私は生まれつき足に障がいがある。その障がいというハンデを埋めるため、五年生の夏、私は手術をした。術後は痛かったし、辛かった。痛みに苦しんでいるとき、母が言った。

「代わってあげられるなら代わってあげたい。」
母のその一言になんて返したのかは覚えていない。もしかしたら、返す言葉が分からなくて返さなかったのかもしれない。
　記憶は曖昧だけれど、こう思ったことだけは今も覚えている。
「なんで母が私の代わりに痛みや苦しみを代わらなければいけないのだろう。」
母はなにも悪いことはしていないし、何も悪くない。この手術を受けると決めたのは私自身だし、痛いのも辛いのも分かっていた。
両親も
「手術受けるの、本当にいいの？」
と、聞いてくれた。それでも手術を受けると決めたのは最終的に私だ。両親は私のハンデをなくすために、時間もお金も、全てを私に費やしてくれた。
　手術の前の日の夜、母が私に手紙を渡してきた。
「普通の人ならしなくてもいい経験をさせてしまってごめんね。」
手紙の一文に書かれていた言葉を読んで、私は母の前で泣いた。
　確かに、私は普通の人ならしなくていい経験をした。だけど、それは決して母のせいではない。誰のせいでもない。なのに、母がまるで自分が悪いとでもいうように書いてあったことが辛くて泣いた。
　でも、その経験によって、得られたものもある。病院で色々な人と知り合って友達になれた。私のことを支えてくれる人たちに触れ、将来やりたいことが決まった。それは、普通の人が経験しなかったからこそ得られたものであって、私の人生において最高の宝物になった。
　もちろん、「なんで私だけがこんなに辛い思いをしなければいけないのだろうか。」と、何回も思った。けれど、その考えに押しつぶされずに踏ん張れたのは、私を支えてくれる色々な人たちがいたからだ。
　学校の先生、兄弟、祖父母、主治医の先生、リハビリの先生、看護師さん、

父親、母親。数えきれないくらいの人に支えられて私は今生きている。

周りからは「かわいそう」とか「大変だね」とか言われるけれど、私はそうは思わない。別に私はかわいそうじゃない。私にはたくさんの愛情をくれる人がいる。大変だとは思わない。いや、確かに術後は大変だったかもしれない。両親や周りの人にはたくさんの迷惑をかけた。だけど、迷惑でも、大変でも、私を支えてくれる人がいる。そんなたくさんの人達のおかげで、私は今、当然のように学校に行って、勉強をして、友達とたくさん話して、いろいろな経験ができている。この「当たり前」が私の中で当然の事とはなってはいけないと思う。私がどれだけの人に支えられて今、当たり前の生活が送れているか忘れてはいけない。そう思えるのは、私がこれらのことを体験したからこそだ。

私は手術や病院生活を経験して色々な事を考えるようになった。その中でも特に考えるのが、「幸せ」についてだ。正直、手術をする前は幸せについて特に深く考えていなかった。でも、手術を受けて、私のために尽くしてくれる人がいて、私の痛みや苦しみを変わってあげたい、そう言ってくれる人がいて…。たくさんの人に支えられて、当たり前の生活ができている。それって、人生で最高の「幸せ」なのではないかと思う。ほとんどの人は普段の生活で当たり前の生活ができている。それは、実は毎日色々な人が生活を支えてくれているからこそ成り立っているのだ。人に支えられて生きていること、人を支えて生きていること、それは人生で最高の幸せなのではないかと私は思う。

私はこの経験を生かして、人に支えられて生きられていることに感謝できる人で居続けたいと思う。そして、人を支えて生きることで、最高に幸せな人生を送りたい。